

賢人ナーラダと彼のヴィーナ

何千年もの昔、シュリー・クリシュナとして生まれ変わったヴィシュヌ神は、古代インドの平原や山々を歩いた。彼は神聖なる愛と英知の体現者で、ダルマの復活者、そしてヨーガに精通した人であった。ヴィシュヌ神の献身的な信奉者で彼に仕えた者の一人に、ナーラダ・ムニがいた。

ナーラダはその時代で最高のヴィーナ奏者として知られる、天上の賢人であり、音楽家であった。彼がヴィーナを奏でると、宇宙の音楽が聞こえたと言われている。彼はまた、多くのシッディ、すなわち霊力を持つ賢人として知られていた。しかしこのように偉大であっても、賢人ナーラダにはもっと学ばなくてはならないことがあった。

ある日クリシュナ神は、彼の結婚式でヴィーナを演奏するようにとナーラダを招待した。ナーラダはとても光栄に思い、即座に承諾した。しかし結婚式が行われる場所を聞いて少し驚いてしまった。それはどんな町や宮殿からも程遠い、人里離れた森に囲まれたヒマラヤ山脈の裾野にある村であった。そして彼が村に着くと、間違った所に来てしまったのかと思うほど、それは小さな簡素な場所であった。しかしそこにはちょうちんが木と木の間に一つあり、遠くからは音楽の音が聞こえてきた。一団の子どもたちが走り寄ってきて、今日は村の長(おさ)の娘が偉大なクリシュナ神と結婚するんだと叫びながら、ナーラダをクリシュナ神が滞在している小屋に連れて行った。

「ナーラダ、よく来てくれたね」と、クリシュナ神は言った。

「ご招待いただき光栄です」と、ナーラダは言った。しかし、クリシュナ神や自分が、こんな所で一体何をしているんだろうと、ひそかに不思議に思っていた。

「さあ、来なさい。家族に会ってもらおう」と、クリシュナ神は言った。そしてすべての村人をまるで高貴な貴族であるかのように、ナーラダに紹介していった。

その後すぐに式が始まり、クリシュナ神と花嫁は森の花の花輪で飾られた。村人は食物、花、簡単な贈り物をささげて、二人の周りに立った。それからごちそうが出て、踊ったり、歌ったり、ゲームをして遊んだ。祝宴は夜中まで続き、辺りは笑いと、愛、そして甘美な音楽の調べで満たされた。

しかし、ナーラダはそれらから一人孤立していると感じた。最大の尊敬を持って歓迎されたにもかかわらず、彼には村人はがさつで、騒々しく思えた。彼らの慣習や儀式は、見慣れない奇妙なものであった。だから、クリシュナ神に結婚式の客のために演奏してくれないかと頼まれると、彼は疲れたと断った。疑いもなく、彼は自分の演奏はこんな人々の集まりには洗練され過ぎていると思ったのだ。

クリシュナ神はナーラダの言い訳を見通していた。彼は他の客人たちに向かって尋ねた。
「誰か他にヴィーナを弾ける者がいるかな」

一人の客、花嫁のおじが手を挙げた。彼は材木を扱う大男で、手は仕事でひどく荒れていて、爪はぎざぎざだった。「君のヴィーナを貸してやってくれ」と、クリシュナ神はナーラダに言った。

ナーラダは信じられないという顔つきでクリシュナ神を見て、「私のヴィーナは、彼には繊細過ぎます。彼は壊してしまうでしょう」とささやいた。

「彼に君のヴィーナを渡しなさい」と、クリシュナ神は繰り返した。不承不承、ナーラダは神の言葉に従った。

男は手のひらを上にして、うやうやしくヴィーナを受け取った。ゆっくりと、注意深く、ヴィーナを額まで持ち上げ、それにプラナムをした。今までこのような素晴らしい楽器は見たことがなかった。彼はナーラダに大きく温かい笑顔を向けると、演奏するために近くにあった岩に座った。

彼は爪がヴィーナに触れないように、指の背を使って音をかき鳴らし始めた。ナーラダは気に入らなかった。そんな風に弾くものではないのだ。彼は聞くに堪えないと思い、少し離れた所に場所を移した。祝宴の客がシーンとしたことに彼は気づかなかった。

男は神の名前をチャンティングしていた。彼は目を閉じ、体を左右に揺らし、愛と熱望がこもった美しい音を奏でていた。それはあたかも、彼と彼の声と楽器が一体であるかのようだった。クリシュナ神は愛のこもった注意を傾けて聞きほれていた。

男は歌い続け、彼の声はとても献身に満ちていたので、客は感動して涙ぐんだ。彼の音楽は辺りの空気をきらきらと輝かせた。彼が座っている岩の粒子さえ感動して、岩はやわらかくなり、溶け始めた。

ついに彼の歌は終わった。最後の音が夜気の中に次第に消えていく中、客は静かに座っていた。しばしの静けさの後、男は立ち上がると、クリシュナ神に、花嫁に、そして一同に向かってお辞儀をした。ナーラダはそこに見当たらなかったのも、ヴィーナを注意深く岩の上に置いて、静かに影の中に去っていった。

「ナーラダ」と、クリシュナ神は呼んだ。「さあ、ヴィーナを受け取ってよいのだよ」

ナーラダは前に進み出たが、男が歌い終わってから数分の間に岩が再び固くなってしまい、ヴィーナが取れなくなってしまっていた。

クリシュナ神はからかうような微笑を浮かべて、それをじっと見詰めた。彼は言った。「ナーラダ、さてこれから何が起こるんだろう」

ナーラダはヴィーナを一生懸命取ろうとするのだが、それは動かなかった。それを見て周りにいる人々は笑いだした。ここにいるのはまれに見るシッディで有名な偉大な賢人である。それが自分のヴィーナを岩から持ち上げることもできないのだ。ナーラダは恥ずかしさで胸が痛んだ。

「私には何が起こったのかさっぱり分かりません」と、彼は言った。彼は目を大きく見開き、嘆願するかのようだった。

クリシュナ神は言った。「ナーラダ、今度はお前がチャンティングしたらどうだろう。すると岩がまた溶けて、ヴィーナを取り戻すことができるだろうから」

そこでナーラダはチャンティングし始めたのだが、自尊心と恥でいっぱいのあまり、集中することも愛を感じることもできなかった。岩は固いままで、ヴィーナは動かせないままだった。ついに彼は己の敗北を認めた。

「もしおまえのヴィーナが欲しかったら、再び彼に演奏してもらうんだな」と、クリシュナ神は優しく言った。

ナーラダは前の奏者を見つけると、謙虚にこう言った。「あなたは私にできないことをなさいます。あなたのチャンティングは石をも溶かしてしまいます。どうかよろしければ、私のヴィーナを岩から取ってくださいませんか」

そこで男は戻って来ると、チャンティングを始めた。彼の声は再び神に対する愛を運び、聞く人々の心を、そして固い石を溶かしてしまった。ナーラダは自分が学ぶべきことがあると気づいて、奏者のそば近くに座ってじっと見詰めていた。

今回は男の声に献身を聞いた。男の顔と手が美しく見えた。彼は辺りを見渡して、以前には奇妙だとか、がさつだと思った人々の顔を、炎の光を通して見た。今は彼らの中にもまた、神の光が見えた。彼の内側に大きな感謝の気持ちが湧き上がると、涙がほほを伝い、クリシュナ神に、彼のヴィーナを弾いた男に、花嫁と彼女を祝っている人々に、そして彼自身に、森に、山に、大空に対して、限らない愛情に満たされてしまった。

その日以来、ナーラダは神の名前を愛と献身を込めてチャンティングすることの力を理解した。彼は、ひとたび純粋な愛を体験すると、探究者は神をどこにでも見るのだと教え続けた。ナーラダは彼の教えを分かち合うために、『ナーラダ・バクティ・スートラ』という偉大な教典をまとめた。

賢人ナーラダは言っている。

「献身の道は、神に達する最も容易な方法である」

スートラ 58

以上が、「賢人ナーラダと彼のヴィーナ」の物語である。

文：Margaret Simpson

表紙デザイン：Jayashree Korula, Soniya Esquivel Salinas

デザインレイアウト：Shabnam Labra

© 2019 SYDA Foundation®. 著作権所有。